

# 原作と翻訳のすきまは埋められるか

——夏目漱石『心』にみる日本文化の表現——

徳 永 光 展

## 1. 出版状況

夏目漱石の『心』は日本国内ではもちろん、諸外国でも広く読まれている<sup>1</sup>。「国際交流基金 日本文学翻訳書誌検索」<sup>2</sup>や「国立国会図書館 日本文学の翻訳を調べるには」<sup>3</sup>といったホームページで検索していくと、本稿執筆に際して32言語まで確認が取れたが、その中には中国語訳<sup>4</sup>、韓国語訳<sup>5</sup>に見られるように、繰り返し別の翻訳者による翻訳が出版されてきているケースもある<sup>6</sup>。

新訳に挑む翻訳者は、当然ながら、旧訳を乗り越えたいと願うものであろう。中国の林少華（2000年初訳<sup>7</sup>、2012年改訳<sup>8</sup>）やイタリアのNocoletta Spadavecchia（1987年初訳<sup>9</sup>、1999年改訳<sup>10</sup>）は自ら旧訳に手を加えて新訳を発表したが、これらの場合は、翻訳者自らが訳文を批判的に検討する力量と機会に恵まれた結果、成し得たものと言えよう。

また、英訳<sup>11</sup>から重訳されたインドネシア語訳（1978）<sup>12</sup>、フランス語訳<sup>13</sup>から重訳されたギリシア語訳（1996）<sup>14</sup>においては、原作・仲介語訳・目的語訳の間における3言語にわたる比較研究の素材を提供しているのである。

一方、翻訳された時期も問題となる。直近だと、『心』執筆100周年であった2014年に3度目のアラビア語訳（قلب الأستاذ／「先生の心」）<sup>15</sup>、2度目のスペイン語訳（Kokoro）<sup>16</sup>に加えて、初のオランダ語訳（Kokoro: de wegen van het hart／「心の重み」）<sup>17</sup>も出版されたが、これらの翻訳は日本に関する知識がヨーロッパ・中東文化圏でも蓄積された現代における感覚で訳文が書き継がれている事実を予想させる。逆に、最も初期の翻訳となった1935年のロシア語訳<sup>18</sup>や1939年のフランス語訳<sup>19</sup>では、日本文化そのものが異国趣味に満ちた所産として訳者の前に姿を現わした可能性があり、日本文化を濃厚に引きずった語彙をどのように説明するかが難題だったのではないかと考えられる。

かつては日本に渡航することが難しく、自国内で極めて限られた情報をもとに翻訳を進めなければならなかったケースも存在した。ベトナム戦争最中の

1971年にベトナム語訳 (Nỗi lòng)<sup>20</sup> は当時の越南部で出版された。今日における日本研究の水準に照らしてみれば不満な点も目立つが<sup>21</sup>、組織的な日本語教育もなされていなかった時期<sup>22</sup>における業績なので、今後の新しい世代による新訳が待たれるところである。

## 2. 評価対象

翻訳研究は、起点言語 (Source Text) と目的言語 (Target Text) の母語話者双方にとって、それぞれに得意とする領域が異なるものである。『心』の場合だと、各言語の翻訳者は目的言語の話者であり、日本人が起点言語の話者という立場になる。日本人で各外国語を学習した方であれば、日本文化を濃厚に引きずった表現がどのように翻訳し得ているかという点に眼差しが向き、その評価者として面目を果たすであろう。一方、翻訳の読者は訳文の流麗さ、読みやすさがどの程度まで実現しているかといった方面に目がいくはずである。

今回は、著者が『心』原文を読める日本人読者であるという立場から<sup>23</sup>、日本に特有の文化的背景を背負った表現が翻訳ではどのように処理されているかという点に絞って言及したい。

## 3. 『心』と「先生」

海外の読者がこの作品を手にした瞬間に立ち止まるのが『心』というタイトルと先生と呼ばれる人物に関する想像であるという事実は想像に難くない。『心』は中国語訳ではすべて『心』<sup>24</sup>、韓国語訳では『마음』(心)<sup>25</sup>、先生は中国語では「先生」(簡体字)<sup>26</sup>または「老師」(繁体字)<sup>27</sup>となっており、韓国語では「선생님」(先生様)<sup>28</sup>で問題は特に生じないのだが、両者の持つニュアンスを非漢字文化圏の読者に分かるように訳すのは難しい。最初の英訳を行った近藤 (旧姓・佐藤) いね子は、ローマ字表記でタイトルを示したが<sup>29</sup>、ここには漱石の師であったラフカディオ・ハーンが漱石の『心』(1914年)に先立つ1896年に *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*<sup>30</sup> (『心——日本の内面生活がこだまする暗示的諸編——』)<sup>31</sup>と題する作品を発表していたことにヒントを得たと考えられる。この書の序文でハーンは、「この巻を構成する諸編は日本の外面生活よりもむしろ内面生活を扱っている。——それだから「心」Kokoro (heart) という標題の下にまとめた。右に掲げた漢字で書かれるこの言葉は、「心情」heartだけでなく情緒的な意味における「心意」mindをも意味し、「精神」spirit、「勇気」courage、「決心」resolve、「感情」sentiment、「情愛」affectionをも

意味する。そして「内なる意味」inner meaningをも意味する。——ちょうど英語で“the heart of things”という「物事のコア」という意味になるのと同じである。」<sup>32</sup>と述べているが、要するに「心」という言葉が多義的であり、英語圏では一言で表現しきれない単語であるということに言及しているのである。以来、非漢字文化圏での翻訳にKokoroがそのまま使用されたケースはEdwin McClellan (1957)<sup>33</sup>、Meredith McKinney (2010)<sup>34</sup>と後に続いた英訳をはじめ、後で述べるように多くある。先生についても、McClellanが英語のteacherよりも、フランス語のmaître (英語のmaster、ドイツ語のMeister)の方が近いと注釈しつつ、Senseiとローマ字表記した方法<sup>35</sup>が、後の諸訳に広く受け継がれるようになった可能性がある。確かに、英訳に先行したフランス語訳では、先生はmaîtreで一貫している<sup>36</sup>。McClellanの英訳はUNESCO COLLECTION OF REPRESENTATIVE WORKSの認定を得たことによって権威を持ち<sup>37</sup>、版を重ね、各国で今日まで広く読まれてきたと理解できる。けれども、既に近藤いね子は、冒頭の謝辞(Acknowledgements)において、「『心』の翻訳は1936年末に東京で始められ、1938年にケンブリッジで終了したが、1941年まで出版されなかった」<sup>38</sup>と述べ、その訳文の中ではthe senseiという表記を“A Japanese word for teacher. But even the professors of a university are called sensei by the students.”(教師を意とする日本語だが、大学教授でも学生からは先生と呼ばれる)という注釈付きで既中使用している<sup>39</sup>。近藤訳とMcClellan訳の比較検討を行った岡田章子<sup>40</sup>、斉藤恵子<sup>41</sup>、秋山勇造<sup>42</sup>、北条文緒<sup>43</sup>各氏、並びにMcClellan自身<sup>44</sup>も先行訳である近藤訳が参照されたかどうかには触れていない。が、タイトルと核となる登場人物の訳語が共通している点は押さえておかなければならないようにみえるのである。ちなみに、McKinneyは著者に対して、「近藤いね子のものは読んでいない。McClellan訳の存在は当然知っていたし、昔読んだが、自らが新訳に挑む際には、影響を受けないように敢えて見ないようにした」<sup>45</sup>と語っていた。

タイトルへの言及を続けると、Kokoroをそのまま使っているのは、英訳のほか、ドイツ語訳(1976)<sup>46</sup>、スペイン語訳(2003<sup>47</sup>／2014<sup>48</sup>)、スウェーデン語訳(1996)<sup>49</sup>、ラトビア語訳(2004)<sup>50</sup>、クロアチア語訳(1953)<sup>51</sup>、ノルウェー語訳(2004)<sup>52</sup>、フィンランド語訳(1985)<sup>53</sup>、ポルトガル語訳(2008)<sup>54</sup>、ヘブライ語訳(1983)<sup>55</sup>、ペルシャ語訳(1999)<sup>56</sup>、ヒンディ語訳(1959<sup>57</sup>／1960<sup>58</sup>)、シンハラ語訳(1978年初版、1999年重版)<sup>59</sup>、ビルマ語訳(1995)<sup>60</sup>、タイ語訳(2000)<sup>61</sup>、中国語訳<sup>62</sup>、韓国語訳<sup>63</sup>であるのに対し、現地語に訳されているのが、フランス語訳Le pauvre coeur des hommes(1939年／「男たちの哀れな心」)<sup>64</sup>、マレー語訳Kalbu

(1986年初版、1996年重版／「心」)<sup>65</sup>、インドネシア語訳 *Rahasia hati* (「心の秘密」)<sup>66</sup>、アラビア語訳 *قلوب الناس المعنوية* (1988<sup>67</sup>／1993<sup>68</sup>「苦しめられている人々の心」)、トルコ語訳 *Gönül* (2011／「心」)<sup>69</sup>、スロベニア語訳 *Koprnenje* (2012／「憧れ」)<sup>70</sup>、ルーマニア語訳 *Zbuciumul inimii* (1985／「心の動揺」)<sup>71</sup>、セルビア語訳 *Duša:Kokoro* (2003／「魂」)<sup>72</sup>、ブルガリア語訳 *Sürtse* (「心」)<sup>73</sup>、ポーランド語訳 *Sedno rzeczy* (1973／「核心」)<sup>74</sup>、ロシア語訳 *Сердце* (1935／「心」)<sup>75</sup>であった。

一方、イタリア語訳では *Anima* (1987／「心」)<sup>76</sup>、*Il cuore delle cose* (1999／「物事の心」)<sup>77</sup>、*Anima e cuore* (2013／「心の拠り所」)<sup>78</sup>と訳語が揺れているが、これなどは何とかして作品世界を象徴する言葉を探そうとしている翻訳者の姿が浮かび上がってくる例であると言えよう。

#### 4. 日本文化の表現

日本独特の文化的背景を持った語彙は翻訳において、一体どのように処理されるべきであろうか。翻訳者が訳語を新たに創造していかなければならないケースも多々存在すると考えられるテキストにあって、翻訳者は訳しきれない表現につき、脚注、巻末注を施したり、あとがき、まえがきで解説したりするなど、様々に工夫を行う必要に迫られるものである。ドイツ語訳 *Kokoro* (1976)<sup>79</sup>を出版した Oscar Benl は注釈を避けようとする態度を貫いたが、このような例はむしろ少数派に属するものである。

注釈を排すれば、読者をテキストの読みに集中させられるという効果が期待できる反面、誤解が生じたり、読者が想像してもイメージがつかめず、いらさせられることもあるはずである。例えば、「上 先生と私」の場面で「私」が中国地方から来た友人について言及する場面がある。「友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども」(第1章／上1)とあるのだが、英訳では近藤訳が “For my friend, though his father was a man of considerable property in Chugoku,”<sup>80</sup>、McClellan 訳が “My friend was from a wealthy family in the Central Provinces, and had no financial worries.”<sup>81</sup>、McKinney 訳が “My friend, who was from a prosperous family in the Chûgoku region, did not lack for money.”<sup>82</sup> となっており、McClellan が曖昧な地方を想起させる語に言い換えているものの、近藤、McKinney は「中国」という言葉を本文中に残し、特に解説は加えない。この方法は、フランス語が *Chûgoku*<sup>83</sup>、ドイツ語が *Chugoku-Landschaft* (中国地方)<sup>84</sup> と

なっていることとも等しい。

しかしながら、この箇所、そのまま注釈なしで中国語訳に使われてしまうと、読者は一瞬、なぜ中華人民共和国が急に登場するのかという驚きに出会ってしまう<sup>85</sup>。読者は等しく躓くのであるが、その中身が全く異なるケースである。

近藤は32箇所<sup>86</sup>、McClellanは22箇所<sup>87</sup>、McKinneyも22箇所<sup>88</sup>に註釈を付けた。けれども、中身は異なる。近藤は“A kind of……”という表現を15箇所に登場させており、本文中にそのままローマ字表記で残した yukata (浴衣)、hekoobi (兵児帯)、shirogasuri (白緋)、saké (酒)、obi (帯)、hakama (袴)、juban (襦袢)、Kirishima (霧島)、torinoko (鳥の子)、tsuku-tsuku-boshi (つく／＼法師)、aburazemi (油蟬)、koto (琴)、kayu (粥)、Zori (草履)、Ashida (足駄) を説明しようと試みる。けれども、これは日本の風俗が英語文化圏にまだあまり知られていなかった1938年時点での判断であって、今日の立場から見れば、もはや説明を要しない事例も含まれていると言うべきであろう。例えば、saké<sup>89</sup>などがその代表ではなかろうか。事実、McKinneyはそのまま注釈なしで使用している。他にも近藤はhashi (箸) にChopsticksという註釈を付けているが<sup>90</sup>、これなども現在であればもはや不必要であろう。

他方、McClellanがローマ字表記し、近藤、McKinneyが訳出した語として見逃せないものに「殉死」(109章／下55)がある。McClellanはjunshi<sup>91</sup>に「殉死は古風な単語で、『君主にならって死ぬ』という意味である」<sup>92</sup>との註釈を添えるが、近藤は“to follow one’s lord to the grave” (君主について墓へ行く)<sup>93</sup>、McKinneyは“to die with your lord” (君主と共に死ぬ)<sup>94</sup>と訳出している。McClellanはjunshiに明治の精神を結びつける読みを読者に促すために、敢えてローマ字表記によりその語を本文中に残したものとみられる。あるいは、同じくjunshiを本文中に残した先行訳のフランス語訳<sup>95</sup>から影響を受けた可能性も否定できない。なお、ドイツ語訳では《Treue-Tod》(忠誠を誓った死)と《 》で強調が施された上で、訳出されている<sup>96</sup>。

他に、興味深い箇所として、「上 先生と私」の冒頭部に、「私」が先生を初めて見た時の出来事が「私がすぐ先生を見付出したのは、先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。」(第2章／上2)と回想されている箇所がある。この「西洋人」を中国語訳では、董学昌(1982)<sup>97</sup>、張正立(1985)<sup>98</sup>、竺家荣(2013)<sup>99</sup>が「外国人」、周大勇(1983)<sup>100</sup>、周大勇(1988)<sup>101</sup>、于暢泳(1999)<sup>102</sup>が「西洋人」、周炎輝(1983)<sup>103</sup>、林少華(2000)<sup>104</sup>、林少華(2012)<sup>105</sup>が「洋人」と訳している。英訳では近藤がa foreigner<sup>106</sup>であるのに対して、McClellan<sup>107</sup>と

McKinney<sup>108</sup> が a Westerner、ドイツ語訳も Europäer<sup>109</sup>、フランス語訳も Européen<sup>110</sup> となっている。「外国人」または a foreigner と訳した場合、その人物の国籍は不明である。しかしながら、この箇所、「私」は「西洋人」の肌が白いことに着目しており、それ故に多くの海水浴客の間で目立ったと回想している。また、「西洋人」と会話する先生は旧制高校で教授された英語、ドイツ語、フランス語のうちのいずれかで会話していた可能性が高く、そのために教養ある紳士として「私」に映った可能性をも考慮に入れる時、日本人以外のこの人物が西洋人であることは自明であるとも解釈できる。そこまで考察を深めていった場合に初めて読者は、「外国人」または a foreigner という訳語を受け入れることができるのである。

## 5. 結語

本稿では、数ある『心』の翻訳を紹介しつつ、日本の文化的背景に深く根差した語彙がどのように訳されているかについて僅かながら述べてきた。英訳については先行研究も存在する<sup>111</sup>ものの、それ以外の言語については、若干の中国語訳研究<sup>112</sup>と、著者がベトナム人と共同で行ったもの<sup>113</sup>以外はなかなか見出せないのが現状である<sup>114</sup>。

けれども、作品は全世界的な規模で読まれてきている。その成果に学ぶ中で、原作とのずれに敏感である態度を取れば、異文化理解に資する上に、漱石研究の新たな領域を開拓することにもなろう。

## 【付記】

『心』原文の引用は、『漱石全集 第9巻』（岩波書店 1994年9月）によったが、ルビは省略した。また、訳文の後に記した数字はそれぞれの書におけるページ数を示したものである。

## 注

- 1 直近では、アンジェラ・ユー、小林幸夫、長尾直茂、上智大学研究機構篇『世界から読む漱石『こころ』』（勉誠出版 2016年1月）がその雰囲気をよく伝えている。
- 2 「国際交流基金 日本文学翻訳書誌検索」のホームページは以下のとおりである。  
[https://www.jpff.go.jp/JF\\_Content/InformationSearchService?ContentNo=13&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html](https://www.jpff.go.jp/JF_Content/InformationSearchService?ContentNo=13&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html)

- 3 「国立国会図書館 日本文学の翻訳を調べるには」のホームページは以下のとおりである。[http://rnavi.ndl.go.jp/research\\_guide/entry/theme-honbun-101113.php](http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-101113.php)
- 4 旧満州国（繁体字）
  1. 夏目漱石著、古丁訳『心』新京市・満日文化協会 1939年10月  
中国（簡体字）
    1. 夏目漱石著、董学昌訳『心』長沙市・湖南人民出版社出版 湖南省新華書店發行 1982年7月
    2. 夏目漱石著、周大勇訳『心』上海市・上海訳文出版社出版 新華書店上海發行所發行 1983年1月
    3. 夏目漱石著、周炎輝訳『心』廣西省・漓江出版社出版 廣西新華書店 1983年10月
    4. 夏目漱石著、趙德遠、張正立、董学昌訳、李致中、李占東校正『夏目漱石小説選（下）』春分之后、使者、心』長沙市・湖南人民出版社出版 湖南省新華書店 1985年2月
    5. 夏目漱石著、周大勇、柯毅文訳、『心』上海市・上海訳文出版社 1988年6月
    6. 夏目漱石著、于暢泳訳『心』海口市・南方出版社 1999年8月
    7. 夏目漱石著、林少華訳『心』廣州市・花城出版社 2000年4月
    8. 夏目漱石著、林少華訳『心』日中対照版 北京市・中国宇航出版社 2008年5月  
（訳文は7に同じ）
    9. 夏目漱石著、林少華訳『心』青島市・青島出版社 2012年1月
    10. 夏目漱石著、林少華訳『心』日中対照版 北京市・中国宇航出版社 2013年6月  
（訳文は9に同じ）
    11. 夏目漱石著、竺家榮訳『心』西安市・陝西師範大学出版本社有限会社 2013年8月
  - 台湾（繁体字）
    1. 夏目漱石著、陳實連訳『心』台北市・先覺出版股份有限公司 2000年11月
    2. 夏目漱石著、陳苑瑜訳『心』台北市・立村文化有限公司 2010年6月
- 5 韓国
  1. 나쓰메 소세키 저, 서 석연 옮김 『마음』 서울특별시・범우사 1990년3월  
（夏目漱石著、ソ・ソクヨン訳『心』ソウル特別市・汎友社 1990年3月）
  2. 나쓰메 소세키 저, 권 순만 옮김 『마음』 서울특별시・일신서적출판사 1994년12월  
（夏目漱石著、ゴン・スンマン訳『心』ソウル特別市・日新書籍出版社 1994年12月）
  3. 나쓰메 소세키 저, 박 유하 옮김 『마음』『꿈 열흘밤, 마음』 서울특별시・웅진출판 1995년, 웅진닷컴 2002년12월, 웅진지식하우스 2016년5월  
（夏目漱石著、パク・ユハ訳『心』『夢十夜、心』ソウル特別市・熊津出版 1995年、〔再出版〕熊津닷컴 2002年12月、熊津知識ハウス 2016年5月）
  4. 나쓰메 소세키 저, 오 유리 옮김 『마음』 서울특별시・문예출판사 2002년8월  
（夏目漱石著、オ・ユリ訳『心』ソウル特別市・文芸出版社 2002年8月）
  5. 나쓰메 소세키 저, 박 순규 옮김 『마음』 서울특별시・인디북스 2002년  
（夏目漱石著、パク・スングュ訳『心』ソウル特別市・インディブック 2002年）



6. 나쓰메 소세키 저, 김 활란 옮김 『마음』 서울특별시・대교베르테스만 2007 년, 더클래식 2014 년 5 월  
(夏目漱石著、キム・ファルラン訳『心』ソウル特別市・大橋ベルデルスマン 2007 年、ドクラシック 2014 年 5 月)
7. 나쓰메 소세키 저, 김 성기 옮김 『마음』 서울특별시・이레 2008 년, 올제 클래식스 2014 년 4 월  
(夏目漱石著、キム・ソング訳『心』ソウル特別市・イ레 2008 年、オルゼ クラシックス 2014 年 4 月)
8. 나쓰메 소세키 저, 서 인영 글, 이 형진 그림 「아름다운 고백 『마음』」 (철학동화 그림책) 서울특별시・올파소 2011 년 1 월  
(夏目漱石著、ソ・インヨン文 イ・ヒョン진絵「きれいな告白『心』」(哲学童話の絵本)ソウル特別市・ウルパソ 2011 年 1 月)
9. 나쓰메 소세키 저, 에니메이션 푸른 문학 『마음편』 서울특별시・북드라마출판사 2013 년 5 월  
(夏目漱石著、アニメーション ブルンムナク『心編』(ソウル特別市・ブクドラマン出版社 2013 年 5 月)
10. 나쓰메 소세키 저, 김 숙희 옮김 『마음』 서울특별시・지만지 2014 년 11 월  
(夏目漱石著、キム・スクヒ訳『心』ソウル特別市・ジ만지 2014 年 11 月)
- 6 多くの翻訳が出版されている韓国における 2009 年までの状況については、尹相仁、朴利鎮、韓程善、姜宇源庸、李漢正共著、館野哲、蔡星慧共訳『韓国における日本文学翻訳の 64 年』出版ニュース社 2012 年 10 月 (153-155 頁) によっても確認できる。
- 7 夏目漱石著、林少華訳『心』廣州市・花城出版社 2000 年 4 月
- 8 夏目漱石著、林少華訳『心』青島市・青島出版社 2012 年 1 月
- 9 Natsume Sôseki. *Anima*. Traduzione di Nicoletta Spadavecchia, Prefazione di Gian Carlo Calza, Milano: L'Ottava, 1987.
- 10 Natsume Sôseki. *Il cuore delle cose*. Traduzione di Nicoletta Spadavecchia, Vicenza: Neri Pozza, 1999.
- 11 Natsume Sôseki. *Kokoro* translated by Edwin McClellan. Chicago: Henry Regnery Company, 1957. London: Peter Owen, 1967. Rutland: Tulltle, 1969. London: Arena, 1984. New York: Dover Publications. 2006. 以下引用は、Tulltle 版に拠った。
- 12 Natsume Soseki. *Rahasia Hati*. Diterjemahkan oleh Hartojo Andangdjaja. Jakarta: Pustaka Jaya, 1978.
- 13 Natsume Sôseki. *Le pauvre cœur des hommes*. Traduit du japonais par Horiguchi Daigaku et Georges Bonneau. Paris: Institut International de Coopération Intellectuelle, 1939; Paris: Gallimard, 1957. 以下引用は、Gallimard 版によった。
- 14 Νατσούμε Σόζεκι. *Kokoro*. Μετάφραση Λήδα Παλαντίου, Αθήνα: Εκδόσεις Κανάκη, 1996.
- 15 ناتسومي سوسيكى، قلب الأستاذ، ترجمة ماهر أحمد محمد الشربيني، القاهرة، سنابل، الفنان وأربعة عشر.
- 16 Natsume Soseki. *Kokoro* traducido por Yoko Ogihara, Madrid: Impedimenta, 2014.
- 17 Natsume Soseki. *Kokoro: de wegen van het hart*. Vertaling van Luk Van Haute. Amsterdam: Lebowsky Publishers, 2014.
- 18 С. Нацумэ. Сердце. Перевод с японского языка и предисловие Н. И. Конрада. Государственное издательство «Художественная литература». Л., 1935. Наука, М., 1973.
- 19 注 13 に同じ



- 20 Natsume Soseki, *Nỗi lòng* dịch bởi Đỗ Khánh Hoàn và Nguyễn Tường Minh, Hà Nội, Nhà xuất bản Hội nhà văn, 2011. なお、2011 年版は Nhà xuất bản Sông Thao, 1971. の再版である。ゲン・タン・タム「ベトナムにおける日本文学翻訳の歴史と位置づけ」(『国際文化学』第 27 号 神戸大学国際文化学会 2014 年 3 月)によれば、Đỗ Khánh Hoàn (フランス語・英語の翻訳者)と Nguyễn Tường Minh (日本語の翻訳者)はコンビとなって、他言語の翻訳を参考にしながら、原文を翻訳するようになったと述べている (27 頁)。この事実から推察するに、ベトナム語版は原文に加えて、先行する英訳とフランス語が参照されて出来上がったと言える。
- 21 「中 両親と私」に限って、下記の形で報告した。  
 ブイ・フン・ミン、徳永光展「翻訳における質の批評——夏目漱石『心』のベトナム語版を例として——」、『総研大文化科学研究』第 10 号 総合研究大学院大学文化科学研究科 2014 年 3 月  
 徳永光展、ゲン・ティ・トゥ・チャン「日越翻訳の問題点——夏目漱石『心』「中 両親と私 5～8」を例として——」、『社会環境学』第 3 巻第 1 号 社会環境学会 2014 年 3 月  
 徳永光展、ホ・ティ・タン・トゥ「夏目漱石『心』「中 両親と私 1～4」ベトナム語改訳の試み」、『社会環境学』第 3 巻第 1 号 社会環境学会 2014 年 3 月  
 徳永光展、ゲン・クオン「夏目漱石『心』「中 両親と私 14～15」ベトナム語改訳の試み」、『社会環境学』第 3 巻第 1 号 社会環境学会 2014 年 3 月
- 22 宮原彬『ベトナムの日本語教育—歴史と実践—』本の泉社 2014 年 6 月
- 23 報告者の立場は、徳永光展『夏目漱石『心』論』(風間書房 2008 年 3 月)にまとめた。
- 24 注 4 を参照のこと。
- 25 注 5 を参照のこと。
- 26 注 4 の中国 (簡体字) 1～11。
- 27 注 4 の台湾 (繁体字) 1、2。
- 28 注 5 を参照のこと。
- 29 Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Ineko Sato. Tokyo: The Hokuseido Press. 1941.  
 Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Ineko Kondô. Tokyo: Kenkyusha 1948. 初版は旧姓・佐藤いね子の名前で出版されたが、その後の再版以降では、新姓・近藤いね子の名前で出版されている。以下引用は、研究社版に拠った。
- 30 Lafcadio Hearn, *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*. Boston: Houghton Mifflin and Company, 1896.
- 31 小泉八雲、平川祐弘訳『心——日本の内面生活がこだまする暗示的諸編——』河出書房新社 2016 年 5 月
- 32 同上。なお原文は以下のとおりである。  
 THE papers composing this volume treat of the inner rather than of the outer life of Japan,—for which reason they have been grouped under the title Kokoro (heart). Written with the above character, this word signifies also mind, in the emotional sense; spirit; courage; resolve; sentiment; affection; and inner meaning,—just as we say in English, “the heart of things.”
- 33 McClellan【前掲、注 11】は、前書き (Foreword) で以下のように書き記し、ハーンの解釈がふさわしいので自らも Kokoro というタイトルを採用したという事実を明らかにしている。

The best rendering of the Japanese word “*kokoro*” that I have seen is Lafcadio Hearn’s, which is: “the heart of things.” (vi)

- 34 Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Meredith McKinney. New York: Penguin Group, 2010. なお、McKinney は、「序文」に続く「タイトルについて」(About the Title) という小文で以下のように説明する。

*Kokoro*, the novel’s title, is a complex and important word that can perhaps best be explained as “the thinking and feeling heart,” as distinguished from the workings of the pure intellect, devoid of human feeling. Because one’s *kokoro* thinks as well as feels, “heart” is at times an inadequate translation. Nevertheless, as the concept of *kokoro* is a pervasive motif throughout the novel, I have chosen to express it with the single word “heart” and to preserve its presence in the translation wherever possible. For the title, it seemed best to retain the original word. (xii)

- 35 原文に付された注釈は以下の通りである。

The English word “teacher” which comes closest in meaning to the Japanese word *sensei* is not satisfactory here. The French word *maître* would express better what is meant by *sensei*. (1)

- 36 注 13 に同じ。

- 37 同書奥付に、This book has been accepted in the Japanese Series of the Translations Collection of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO)とある。

- 38 注 29 に同じ。

- 39 同上、1 頁

- 40 岡田章子「『こころ』の英訳をめぐる—McClellan 訳と近藤いね子訳の比較—」、「桃山学院大学総合研究所報」第 4 巻第 1 号、桃山学院大学総合研究所 1978 年 6 月

- 41 斉藤恵子「二つの KOKORO—マクレラン訳と近藤いね子訳—」、「比較文学研究」第 57 号、東大比較文学會 1990 年 6 月

- 42 秋山勇造「『心』の英訳—近藤訳とマクレラン訳—」、秋山勇造『翻訳の地平—翻訳者としての明治の作家—』翰林書房 1995 年 11 月

- 43 北條文緒『翻訳と異文化—原作との〈ずれ〉が語るもの—』みすず書房 2004 年 3 月

- 44 McClellan, Edwin. “On Translating *Kokoro*.” *A Symposium on Natsume Sôseki’s Kokoro: A Selection from the Proceedings*, Ed. Lien-hsiang Lin. Singapore: Department of Japanese Studies, National University of Singapore, 1994.

エドウィン・マクレラン、山中由里子訳「『こゝろ』の翻訳について」、平川祐弘・鶴田欣也訳『漱石の『こゝろ』—どう読むか、どう読まれてきたか—』新曜社 1992 年 11 月

- 45 2015 年 6 月 28 日、於・University House, Australian National University.

- 46 Natsume Sôseki. *Kokoro*. Übersetzung aus dem Japanischen und Nachwort von Oscar Benl. Zürich: Manesse Verlag, 1976.

- 47 Natsume Soseki. *Kokoro*. Introducción, traducción y notas Carlos Rubio, Madrid: Editorial Gredos, S.A 2003.

- 48 Natsume Soseki. *Kokoro* traducido por Yoko Ogihara, Madrid: Impedimenta, 2014.

- 49 Natsume Soseki. *Kokoro*. Översättning från japanska: Vibeke Emond. Uddevalla: Bokförlaget Pontes, 1996.

- 50 Nacume Sôseki. *Kokoro*. No japânu valodas tulkojusi Ilze Paegle, Riga:Atēna, 2004.

- 51 Natsume Soseki. *Kokoro*. Preveo Mirko Paut. Zagreb: Zora, 1953.

- 52 Natsume Soseki. *Kokoro* oversatt av Ika Kaminka, Oslo: Solum, 2004.

- 53 Natsume Soseki. *Kokkoro*. Suomentanut Kai Nieminen, Helsinki: Kustannusosakeyhtiö Tammi, 1985.
- 54 Natsume Soseki, *Coracao* traduzido por Junko Ota, São Paulo: Globo, 2008.
- 55 .1983 ,נתסומה סוסעקי, מורמוראקא קוקורו, תל אביב: הוצאת כרמל, 1983.
- 56 נתסומה סוסעקי, کورکور، ترجمه ش. خوشبخت، تهران: آبا، ۱۳۷۸.
- 57 नाटसुमे सोसेकि, कोकोरो, वी.वी. राघवेदर द्वारा अनुदित, मैसूर, न्यूज़पेपर हाउस, 1959
- 58 नाटसुमे सोसेकि, कोकोरो, एम.आर. चंद्रशेखरन द्वारा अनुदित, तुरशिर, करेंट बुक्स, 1960
- 59 නාට්‍යුමේ සෝසෙකි. කොකොරො. පරිවර්තනය කළේ නදුකි නොගුචි, කොළඹ, ලේක් ආරෝපනය, 1978. කොළඹ: ගොඩගේ ජාත්යන්තර ප්‍රකාශකයෝ, 1999.
- 60 နာတုမေ့ဆွေဝက်။ ကိုကိုရို။ ရဲမြလွင် ဘာသာပြန်ဆိုသည်။ ရန်ကုန်: လှဌေးမှ ထုတ်လုပ်သည်။ ၁၉၉၅
- 61 นะທະພິເນະ ໄພເຂະດີ. ໂຄະໂຄະໂຣະ. ດຣ.ປຣັຍາ ອິງຄາກິຣມຍ໌ ໂສ໌ຮີເອະ ແລະ ກນກ ສຸຄະກາຣິນທຣ໌ ແປສ. กรุงเทพมหานคร: ดอกหญ้า, 2000.
- 62 注4に同じ。
- 63 注5に同じ。
- 64 注13に同じ。
- 65 Natsume Soseki, *Kalbu* diterjemahkan oleh Thaiyibah Sulaiman, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1996.
- 66 注12を参照のこと。
- 67 ناتسومي سوسيكى، قلوب الناس المُعذَّبة، ترجمة على أحمد باشا، دمشق، وزارة الثقافة، ألف وتسعمائة وثلاث وتسعون.
- 68 ناتسومي سوسيكى، قلوب الناس المُعذَّبة، ترجمة على أحمد باشا، دمشق، وزارة الثقافة، ألف وتسعمائة وثلاث وتسعون.
- 69 Natsume Soseki, *Gönül* Bilal Unai tarafından tercüme, Istanbul: Paraf Yayinlari, 2011.
- 70 Natsume Soseki, *Koprnenje* prevedel Izток Ilc, Ljubljana: Zalozba Sanje, 2012.
- 71 Natsume Soseki, *Zbuciumul inimii*. In romaneste de Elena Suzuki si Doina Ciurea. Bucuresti: Editura Univers, 1985.
- 72 Nacume Soseki. *Duša: Kokoro*. Prevod sa japanskog Snežana Janković, Sombor: Publikum, 2003.
- 73 Н. Сосеки, Сърце преведена от Дора Барове, София: Народна култура, 1987.
- 74 Natsume Sōseki. *Sedno rzeczy*. Przełożył z japońskiego Mikołaj Melanowicz. Warszawa: Państwowy Instytut Wydawniczy, 1973.
- 75 注18を参照のこと。
- 76 注9を参照のこと。
- 77 注10を参照のこと。
- 78 Natsume Sōseki. *Il cuore delle cose*. Traduzione di Antonio Vacca, Tricase: Youcanprint Self-Publishing, 2013.
- 79 注46を参照のこと。
- 80 注29, p.2
- 81 注11, p.76
- 82 注34, p.4
- 83 注13, p.18
- 84 注46, s.10
- 85 注4を参照のこと。
- 86 注29を参照のこと。
- 87 注11を参照のこと。

- 88 注34を参照のこと。  
89 注29のp.19にA kind of wine made from rice.とある。  
90 注29、p.80  
91 注11、p.245  
92 注91に同じ。  
93 注29、p.280  
94 注34、p.232  
95 注13、p.306  
96 注46、s.356  
97 注4の簡体字1、3頁  
98 注4の簡体字4、583頁  
99 注4の簡体字11、4頁  
100 注4の簡体字2、3頁  
101 注4の簡体字5、5頁  
102 注4の簡体字6、5頁  
103 注4の簡体字3、5頁  
104 注4の簡体字7、5頁  
105 注4の簡体字9、5頁  
106 注29、p.3  
107 注11、p.3  
108 注34、p.5  
109 注46、s.12  
110 注13、p.19  
111 夏目漱石『心』英訳研究文献には、以下のようなものがある。

McClellan, Edwin. "On Translating Kokoro." *A Symposium on Natsume Sôseki's Kokoro: A Selection from the Proceedings*, Ed. Lien-hsiang Lin. Singapore: Department of Japanese Studies, National University of Singapore, 1994.

エドウィン・マックレラン、山中由里子訳「『こゝろ』の翻訳について」、平川祐弘・鶴田欣也訳『漱石の『こゝろ』—どう読むか、どう読まれてきたか—』新曜社 1992年1月

秋山勇造「『心』の英訳について」、「人文研究」第115号、神奈川大学人文学会 1993年3月

秋山勇造「『心』の英訳—近藤訳とマクレラン訳—」、秋山勇造『翻訳の地平—翻訳者としての明治の作家—』翰林書房 1995年11月

井本美紗緒「日本文学英訳における日英語の比較Ⅰ—Edwin McClellanによる夏目漱石作『こころ』の英訳について—」、「福岡女子短大紀要」第5号、福岡女子短期大学 1972年3月

大澤吉博「夏目漱石『心』における非日常性—その構造と文体—」、「比較文学研究」第80号、東大比較文学會 2002年9月／〔再掲〕大澤吉博『言語のあいだを読む—日・英・韓の比較文学』思文閣出版 2010年7月

岡田章子「『こころ』の英訳をめぐる—McClellan訳と近藤いね子訳の比較—」、「桃山学院大学総合研究所報」第4巻第1号、桃山学院大学総合研究所 1978年6月

- 川崎謙、鳥井美和、浜部武生、福見克敏「理科教育の鍵概念 「自然」に関する資料—漱石『道草』『こゝろ』に見る自然—」、岡山大学教育学部研究集録 第90号、岡山大学教育学部 1992年3月
- 近安里「夏目漱石『こころ』考—E・マクレランの英訳をめぐって—」、「明治大学日本文学」第23号、明治大学日本文学研究会 1995年6月
- 近安里「『心』のコロケーションに関する一考察—夏目漱石の『こころ』から—」、「明治大学日本文学」第24号、明治大学日本文学研究会 1996年6月
- 斉藤恵子「二つのKOKORO—マクレラン訳と近藤いね子訳—」、「比較文学研究」第57号、東大比較文學會 1990年6月
- 高島敦子「夏目漱石と現代人の問題—英文『こころ』研究—」、「青山學院女子短期大學紀要」第27号、青山学院女子短期大学 1973年11月
- 徳永光展、小河賢治「英文・夏目漱石『心』の研究—Meredith McKinney 訳の評価をめぐって—」、「社会環境学」第2巻第1号 社会環境学会 2013年3月
- 徳永光展「日英翻訳における時制の処理—夏目漱石『心』のMeredith McKinney による英訳を例として—」、「タイ国日本研究国際シンポジウム2014 論文報告書」チュラーロンコーン大学文学部東洋言語文化学科日本語講座 2015年3月
- 徳永光展「夏目漱石『心』英訳にみる日本文化翻訳上の問題点—Meredith McKinney 訳を手がかりに—」*The electronic proceedings of the 4th International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia "State and Non-state Actors in Japan-ASEAN Relations and Beyond"* edited by the Institute of East Asian Studies, Thammasat University, November. 2015.
- 徳永光展「『夏目漱石『心』英訳で読む「下 先生と遺書」—Meredith McKinney 訳の分析—」、「北海道言語文化研究」第14号、北海道言語研究会 2016年3月
- 徳永光展「夏目漱石『心』英訳で読む「上 先生と私」—Meredith McKinney 訳の分析—」、李東哲、権宇、安勇花主編『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語文化研究 第4輯』延辺大学出版社 2016年6月
- 徳永光展「夏目漱石『心』英訳における語法の処理—Meredith McKinney による翻訳を資料として—」、「日本語日本文学」第45輯 輔仁大學外語學院日本語文学系 2016年7月
- 徳永光展「夏目漱石『心』英訳の状況—Meredith McKinney の翻訳をめぐって—」、「福岡工業大学研究論集」第49巻第1号（通巻第75号）福岡工業大学 2016年9月
- 徳永光展「『夏目漱石『心』英訳で読む「中 両親と私」—Meredith McKinney 訳の分析—」、「比較文化研究」第123号 日本比較文化学会 2016年10月
- 北條文緒『翻訳と異文化—原作との〈ずれ〉が語るもの—』みすず書房 2004年3月
- 前田尚作『日英語学研究—漱石著『こゝろ』の英訳に学ぶ—』山口書店 1996年3月
- 丸山和雄「日英比較表現研究—こころ・Kokoro (PART I) —」、「立正大学短期大学部紀要」第25号、立正大学短期大学部 1989年9月
- 丸山和雄「日英比較表現研究—夏目漱石「こころ」の言語分析研究 (PART II) —」、「立正大学短期大学部紀要」第26号、立正大学短期大学部 1990年3月
- 丸山和雄「日英比較表現研究—夏目漱石「こころ」の言語分析研究 (PART III) —」

- 「立正大学短期大学部紀要」第28号、立正大学短期大学部 1991年6月
- 112 日本語で読める中国語訳研究には、以下のようなものがある。
- 呉川「コロケーションにみる「こころ」のイメージ—夏目漱石の『こゝろ』における「心」の中国語訳を通して」、「日本大学国際関係学部研究年報」第18巻2号  
日本大学国際関係学部国際関係研究所 1997年12月
- 孫軍悦「二つの『心』—中国における『こゝろ』の受容—」、「漱石研究」第14号  
翰林書房 2001年10月
- 113 注21の文献を参照のこと。
- 114 例えば、わずかに神西清「『心』の露訳—コンラド教授の業績—」、「文学」第4巻第12号（岩波書店1936年12月）を見出せる程度である。